

博士論文審査要旨

論文提出者：斎藤 みほ

論文題目：現代の日本における「共事的子育て」の可能性と社会・文化的背景をめぐる人類学的研究

審査委員：

主査：小田 亮	人文科学研究科	教授
副査：綾部 真雄	人文科学研究科	教授
副査：田沼 幸子	人文科学研究科	准教授

I. 本論文の目的

本論文の目的は、現代の日本社会における「子育ての社会化」の現状と課題について概観した上で、「社会化」のあり方を人類学的知見から見直し、「孤育て」などと呼ばれる、母親に降りかかる子育ての困難さを軽減するための解決策の方向性の転換を提案することにある。

現代の日本では子育てについては、母親が一手に育児を担う状況が、母親の育児ノイローゼ、産後鬱といった健康被害、さらには児童虐待などの一要因となっているとも言われている。その問題点を改善するために、行政の側から近年進められているのが、子育てを母親だけでなく社会で担っていこうとする「子育ての社会化」である。この行政主導の「子育ての社会化」の具体策としては、保育園の増設、夜間保育や病児保育といった家庭や子どもの状況に応じた様々な託児サービスの新設などがある。それらを本論文では「子育ての公事化」と呼ぶ。その推進の背景には、近代以降、育児という営みが核家族を中心とした近代家族、さらにその内部の母親のものとされてきたということへの批判・反省がある。しかし、子育ての公事化によって私事の子育ての問題が解消しきれわけではない。また、この社会化＝公事化は、子育ては家庭で行われるべきものという家族主義的な規範を弱めるものではなく、あくまでそれを補うものとされているため、母親や育児支援者側に葛藤を生んでいることも指摘されている。本論文は、その解決に向けて、私事でも公事でもない「共事の子育て」についてのフィールドワークを踏まえて、「子育ての共事化」という方向への転換を提案する。

II. 本論文の構成

本論文の構成は次の通りである。

序章 本研究の目的と構成

第1節 本論文の目的とその背景

- 1 「子育ての社会化」をめぐる言説とその課題
- 2 「共事の子育て」とマルティプル・ペアレンティングという視角

第2節 調査対象について

第3節 本論文の構成

第1章 「孤育て」という問題と「子育ての社会化」への動き

第1節 家庭と母親の孤立による「孤育て」という問題

- 1 日本における「近代家族」の萌芽
- 2 近代家族の大衆化と子育てにおける母親役割の肥大化
- 3 近代家族のはらむイデオロギーと公／私の分離

第2節 「子育ての社会化」への動きとそれをめぐる議論

- 1 男女共同参画と父親の子育て
- 2 近代家族の限界と子育ての脱家族化
- 3 母親たちのネットワーク

第2章 子育てを担う現代の母親たち

第1節 働く母親たち

- 1 頼れる実家・義実家
- 2 夫の子育て参加 36
- 3 親族以外の付き合い
- 4 子育てと仕事の両立、子どもとともに生きること

第2節 筆者の体験から

- 1 孤独と「自分の時間」
- 2 SNS やインターネットによる共有
- 3 子育て支援施設の利用
- 4 保育園入園

第3節 母親たちの苦悩

- 1 育休と「孤育て」
- 2 仕事と子育ての両立
- 3 後ろめたさと自己嫌悪

第3章 マルティプル・ペアレンティングによる子育て

第1節 複数の親による育児

- 1 マルティプル・ペアレンティングとは
- 2 ヒト以外の動物によるマルティプル・ペアレンティング
- 3 ヒトのマルティプル・ペアレンティング

第2節 人類学にみるマルティプル・ペアレンティングの事例

- 1 婚姻・居住形態と子育て環境
- 2 子どもと子育てをめぐる人間関係
- 3 養子たち

第3節 民俗学にみる日本のマルティプル・ペアレンティング

- 1 「ムラの子」
- 2 擬制的親子関係

第4節 現代に見直されるマルティプル・ペアレンティング

- 1 母子関係とそれを取り巻く社会関係
- 2 「わたくしごと」(私事)と「わたしたちごと」(共事)
- 3 マルティプル・ペアレンティングがもたらすもの
- 4 現代の子育て環境とマルティプル・ペアレンティング

第4章 新島のモンモと「もんもクラブ」

第1節 調査地と調査概要

- 1 新島村の概要
- 2 新島村の子育て環境
- 3 調査概要

第2節 新島のモンモ

- 1 民俗的資料にみるモンモについての記述
- 2 利島のモリ
- 3 昭和初期のモンモ体験
- 4 高度経済成長期以降のモンモ

第3節 現代の子育てと「もんもクラブ」

- 1 新島での子育て——島内出身の母親たち
- 2 新島での子育て——島外出身の母親たち
- 3 有償制の育児支援「もんもクラブ」

第4節 新島のモヤイとモンモ

- 1 相互扶助としてのモヤイ
- 2 モンモによる親戚つなぎ
- 3 「ムラの子」としての子育てと母子関係
- 4 子育てにおける互酬性と市場交換

第5章 共同保育という試み

第1節 共同保育の社会的背景

- 1 高度経済成長と育児
- 2 ウーマン・リブ運動

第2節 共同保育所の記録から

- 1 共同保育所に携わる人々——父母、保育士、地域住民
- 2 私生活と保育所運営

第3節 たつのこ共同保育所

- 1 開設から現在まで
- 2 「親」と「保育者」の役割と関係
- 3 〈たつのこ〉の子どもたち
- 4 子連れ保育における母子関係

第4節 沈没家族

- 1 沈没家族の始まり
- 2 〈沈没家族〉での子育て
- 3 「家族」はいない

第5節 共同保育における「共同」のあり方

- 1 子育てによる社会化
- 2 「私」領域と「私」領域の重なり
- 3 「自分達」、「よその子もいっしょに」という共同性
- 4 役割をはみだす

第6章 現代日本のシェアハウスにおける子育て

第1節 シェアハウスという住まい方

- 1 シェアハウスに関する定義と分類
- 2 シェア居住の広まり
- 3 シェア居住をめぐる社会的関心と学術的議論

第2節 シェアハウスでの子育て

- 1 シェアハウスでの結婚、出産、子育て
- 2 親と住人と赤ちゃん
- 3 社会的批判

第3節 シェア居住での子育ては新たな子育てスタイルの選択肢となるのか？

- 1 子どもがいる日常と「相互的な主体性」の形成
- 2 「わたしたちごと」を取り戻す

終章 子育ての場の回復のために

第1節 子育てをになう「社会」のあり方

- 1 「公」という社会・「共」という社会
- 2 公事的子育て（公事的ケア）の問題
- 3 共事的子育てが生起する場
- 4 単独性を保持するケア

第2節 子育ての場を衰退させるもの

- 1 システムへの依存と自立・自律
- 2 単配列的な規制と実子主義

第3節 子育ての場をとりもどす

- 1 「わたしたちごと」と「生きたルール」というスキマ
- 2 ケアを起点とするつながり方
- 3 今後の展望と課題

参考文献

Ⅲ．本論文の概要

以下に本論文の内容を要約する。

序章では、現代の「孤育て」と呼ばれるような一手に育児を担う母親たちのさまざまな困難についての議論において、私（家庭）と公（社会）のどちらがどれだけ育児を担うべきかという選択やバランスが問題とされているが、この公と私という二元論において子育てのあり方を探る限り、どちらにも問題があるために、行き詰まり状態になっていることが指摘されている。社会学、社会福祉学など様々な分野で、この「公／私」という二項対立的観点を脱し、相対化することによってより多面的な子育ての可能性を見出す必要性が説かれているが、具体的な展開は未だ途上である。そのような状況を受けて、本論文では、「公／私」という観点を脱する方途として、子育ての「公事化」とは異なる社会化の可能性を見出し、公事化とは異なる子育ての社会化のあり方を「子育ての共事化」として示し、「共事的子育て」を一つの解決策として提案することを目的とすると述べる。

第1章では、近代化という歴史・社会的変化において、子育てが家庭という私的領域で、母親という存在によって一手に担われるような状況がつけられてきた背景を追っている。この近代化という変化は、生産労働と再生産労働が公的領域と私的領域としてジェンダー化されたかたちで分割配分されてきた歴史でもあり、それによって、女性は家事や育児とともに「近代家族」という私的領域に閉じ込められてきたとされている。国家的な施策や政策も、この「近代家族」という単位を基礎にして進められてきており、そのような政策によって、女性や子どもを「近代家族」という私的領域に囲いこみ、生産労働だけを担うことのできる個人を前提として公的領域が構成されてきた。こうして成立した近代社会のなかで、子育て機能は家族が私的領域として成立するための条件として措定されてきたといえる。こうした歴史的背景から、子育ての公事化とはいっても、閉じられた私的領域としての家族を基本とすることが前提となっており、簡単に脱家族化することができない理由があると指摘する。

第2章では、子育て中の母親たちへのインタビュー調査と筆者の子育て体験を基に、現代の母親たちの具体的な問題点を探っている。まず、現代の母親たちが、子育てにおいて、自身の家族からの支援や、自治体などの公的支援などをいかに活用しているのか、そこにどのような葛藤や問題を抱えているのかを調査内容から示す。そこで明らかにされたのは、公的支援の重要さとともに、しかしそれだけでは解決しない母親たちの精神的葛藤や、逆にその公的支援のあり方によって追いつめられる「母親」としての自責の念やうつ状態などの困難さであった。つまり、公的援助を受けながらも母親たちは、一方で自立を求められ、他方でファインマンのいう「二次的依存」の状態に置かれるため、その依存状態を恥じたり自責の念を持たされたりしている。こうした状況から、現代の子育てを改善していくには、「公／私」の二分法を前提とする「子育ての公事化」とは異なる視点や方策が必要であることが示唆される。

ここから第3章では、もうひとつの「子育ての社会化」のあり方として、「子育ての共事化」ないし「共事の子育て」があることを示し、それがまったく新しいものではないことを明らかにするために、人類学における民族誌や民俗学的調査報告からの事例を概観している。民族誌には、さまざまな社会における子育てのあり方として、アロマザリングやアロペアレンティング、マルチプル・ペアレンティングといった、子どもの生物学的親以外の者が複数関わる子育てのあり方が数多く残されている。これらの事例から、どのような社会・文化的背景においてそうした子育てが成されているのか、現代のそれと比較しながら、「共事の子育て」の基盤となる要素を考察している。また、こうした実親以外が関わる子育てのあり方が、現代の「孤育て」状況にある母親たちや子どもたち、また母子関係のあり方にもたらす利点を考察している。

こうした「共事の子育て」に関する記録の数や社会的広がりや人類進化におけるその重要性の指摘からは、そうした子育てがある一定の普遍性を持っていることがうかがえる。そこで、ではなぜ今日において「共事の子育て」という実践が実際には行われていてもなくなったものとされたり、見えにくくされてたりしているのかという疑問を考察するために、第4章から第6章にかけては、現代社会においてなされてきた「共事の子育て」の試みと見られる事例を筆者の調査と文献を基に取り上げ、そこではどのような試みや実践がなされてきたか、またそれらが現代という文脈で直面する課題などを取り上げ、どのような要因が現代における「子育ての共事化」を困難なものとしているのか、また現代社会で「共事の子育て」を行うとすれば、どういった形で可能なのかを探っていく。

事例として挙げるのは、伊豆諸島の新島・利島に見られるモンモ制度と、その記憶を活かした公的支援としての「もんもクラブ」、1970年代に起こったウーマン・リブ運動の影響を受けながら生まれた共同保育、そして現在行われているシェアハウスでの子育ての三つである。

第4章は伝統的なマルチプル・ペアレンティングと現代社会での共事の子育てをつながる章で、新島にかつてあった、子どもが生まれると近所や親戚で小学生くらいの女子を子どもの子守りとしてつけるというモンモ制度と、その現代版ともいえる「もんもクラブ」という支援策を扱っている。モンモとは子守りの女子のことで、無償の子守りであり、子どもの家とモンモの家とは贈与のやりとりで結ばれていた。モンモと子守りをされた子どもは一生の付き合いをもち、それぞれの家もまた親戚同士として結びつく。現代では、こうした制度はほとんど見受けられなくなったが、今でも近所や親戚同士で子どもの面倒を見るという素地は残されている。また、現在の新島では、村による子育て支援事業が「もんもクラブ」という名称で運営されている。主に子どもの預かりを仲介する支援で、子どもを預けたいという依頼会員が預かる援助会員に金銭を払って預かってもらうもので、依頼会員の母親には島に知り合いの少ない島外から来た人が多く、

公的支援と市場交換を合わせた形となっている。けれども、依頼の回数を重ねるうちに、依頼会員と援助会員の間に個人的交流が生まれ、制度外の援助や付き合いも作られている。

第5章で扱う二つ目の事例の共同保育所とは、1970年代に女性の生き方についての当時の社会的規定に疑問を抱いた母親たち、また認可保育園に子どもを入れられなかった親たちが集まり、自身たちで経営を始めた保育所である。親たちは自分たちで保育士を探し、親と保育士たちによる共同経営という形で保育園を運営した。第5章では、親と保育士たちによる保育の共同化過程に着目し、そこに生じた親たちの意識の変化を文献と当事者たちへの聞き取り調査で明らかにして、保育園に預けることが可能になっても無くなるわけではない共同化の意義について考察している。そして、当事者たちが語る共同保育における「集団的エロス」ということを、当時のウーマン・リブ思想を参照しつつ、それが女性の個人としての「総体性」を回復するための共同化を目指していたことを指摘する。また、自宅で実子の共同保育を行った女性とその子どもの体験を、そこで育った子どもである加納土の「沈没家族」というドキュメンタリー映画と加納土氏への聞き取りを基に示し、共同保育における「複数の親」による子育ての意味を、現在の実子主義的子育てと対比させて考察している。

「共事的子育て」の三つ目の事例として第6章で取り上げるシェアハウスでの子育ては、近年増えつつあるシェアハウスという居住形態で子どもを育てている事例である。シェアハウスは、一つの家に他人同士がそれぞれの個室を持ちながら（場合によっては数人で部屋も相部屋になりながら）、台所、風呂、トイレなどの共同スペースや物資を共有する暮らし方である。こうした暮らし方が近年の若年層に増えつつあることの社会的背景を考えると同時に、シェアハウスでの子育てが、その夫婦や住民の生活にどのような影響をもつのか、核家族世帯による暮らしと比較し、「家族」の在り方の変化について考察する。

三つの事例は、子育てを近代家族的「私事」としてでもなく、公的システムとしての「公事」でもない地点で行っている。子どもの親とその周囲の人間とによる共同での子育てがそこでは実践されており、つまり「私」か「公」か、「家族」か「脱家族」か、といった排他的な二者択一の選択によらない、ネグリとハートのいう「共（コモン）」というあり方なのである。この「共（コモン）」というあり方は、私とも公とも異なるもので、本論文で提示する「共事的子育て」とは、この「共＝コモン」を基盤とする子育てであり、個人を役割や属性ではなく包括的に理解するような単独性どうしの関係性（ウーマンリブで言われていた「総体性」）のなかで営まれる子育てである。

これは現代では主流となっている、国や自治体といった公的機関、公的システムによるケアの公事化とは異なる「子育ての社会化」である。ネグリとハートが述べるように「共（コモン）」という社会のあり方は、私たちの周囲のいたるところにあるにもかか

わらず、全てのものを私的なものか公的なものかに分けてしまうイデオロギーによって、極めて見にくいものになっている。終章では、この「公／私」の二元論と「共（コモン）」との相違を考察した上で、「公事的子育て」が抱える問題・課題点を、イグナティエフによる社会福祉批判などを援用して、自責の念を生み出すとともに個々人の単独性を無視せざるを得ないことに見出し、それらの問題点を「共事的子育て」がいかに補うのかを示している。さらに、今日において「共事的子育て」が困難とされる理由や、子育てが窮状に追い込まれる要因について、「公」という社会やシステムに対する私たちの依存があると同時に、その依存を、自立・自律の重視によって、恥とするような観念体系があること、私的領域の自立を基礎とすることで実親実子のみを「親子」とし、子育てを実親のみのものとするような実子主義と呼ばれる社会規範があることなどを挙げ、それらを「共事的子育て」がどのように克服できるのかを分析している。そして最後に、「共事的子育て」を実践するためには、いかなる場や条件が必要となるのかといった点をこれまでの事例や考察から展開し、単独性どうしの関係からなる「共（コモン）」という場を構築する実践や、「子育ての共事化」のために、依存やケアを社会においていかに位置づけるべきかといった問題を議論している。

Ⅲ．審査結果

本博士論文の公開審査は、2020年1月21日（火）の午後4時30分～6時の間に、5号館1階会議室で行われた。

本論文は、筆者自身の子育て経験から、公的支援や家族の支援に恵まれたとしても、なぜ母親の「孤育て」という困難さが付きまとうのかという実感的な問題意識を出発点としており、問題点が具体的かつ共感しやすい形で提示している。そのために、人類学や民俗学で報告されている、これまでもさまざまな形態としてあった「マルチ・ペアレンティング」の経験を活かした「共事的子育て」へと方向性を転換すべきという本論文の提案に説得力があることが、審査委員から高く評価された。

また、その提案が伝統的形態のマルチ・ペアレンティングをそのまま用いることは不可能であることを前提とし、現代社会に見られる「共事的子育て」の事例として、新島の「もんもクラブ」、1970年代に始まった「共同保育所」、現在増えつつある「シェアハウスでの子育て」という三つを、筆者自身の調査を基にして、その可能性を探究していることも評価された。とりわけ、これまでマルチ・ペアレンティングや共事的子育てとして捉えられてこなかったシェアハウスでの子育てを事例として挙げている点は独創性があり、高く評価できる。また、新島の「モンモ」と「もんもクラブ」の事例も、単なる過去の伝統的な事例としてではなく、市場交換を用いた公的支援のシステムが共事的な関係へとずらされていて、そのずらしにモンモという歴史的記憶が用いられているという分析によっ

て、現代に伝統的なマルチ・ペアレンティングを活かす事例と位置付けている点も高く評価される。

また、本論文は、理論的にも、新しい理論をもってきたり飛躍したりすることはないが、イグナチエフの福祉社会批判やファインマンの「依存の私事化」による「二次的依存」状態といった理論を、ネグリとハートの単独性どうしの関係による「コモン」という議論と結びつけるなど、既存の議論を新しい領域に援用して、その可能性を拡大することに成功している。このことは、適切な理論を自分でもってきて適切なところで使うという、論文提出者の研究能力の高さを示していると言える。

それらの高い評価とともに、審査委員からは、提案型の論文となっているにもかかわらず、「共事的子育て」を拡大するための政策がいかなるものかを具体的に示すに至っていないこと、マルチ・ペアレンティングの事例の紹介が主としていわゆる伝統的な社会の事例になっていて、それをそのまま復活させるのは不可能であり、そのようなことを提案しているのではないと述べながら、現代社会にどのように活かすのかが（「もんもクラブ」の事例だけでは）やや不明確といった指摘もなされた。さらに、ウーマン・リブの影響によって始まった「共同保育」を「女性個人の総体性」（＝単独性）を回復させるものと評価し、なぜそれがその後継承されなかったのかという点について、社会がより個人化してしまい、公的システムへの依存が高まったからと述べている点について、その原因は、ウーマン・リブの理論による共同保育のやり方にもあるのではないか、すなわち、総体性＝単独性どうしという関係性だけでは「息苦しい」関係になるということを決済できなかったのでは、という質疑も出された。それに対して、論文提出者からは、具体的な解決策の提示の不十分さは自覚しているが、転換の方向性だけでも示すことが目的であったこと、伝統的なマルチ・ペアレンティングの事例はそれを活かすというより、それが人類文化の普遍的なものであることを示すためのものというほうが強かったという応答があった。そして、最後の点については、公開審査の場で、現代の「シェアハウスでの子育て」には部分的関わりも含まれていて、息苦しくない「共事的子育て」の可能性があるという議論がなされ、今後の研究課題とされた。その場での応答や議論においても、論文提出者の研究への真摯な態度と高い能力が示されたと言える。

以上の審査により、審査員一同は、斎藤みほ氏に博士の学位を授与することが適当であると判断した。